

## 老 骨 の 偶 想

飯 本 信 之

光陰は人を待たず、私も遂に傘寿を越え、いよいよ恍惚の境に近づいて、ただラジオ・テレビを友として寧日を過している。偶々先日岡田久美子さんを通じて編集部からの要請があったので、教養についての一端を述べさせて貰うことにした。

古いことだが中央公論に幸田文さんが書かれた「みそっかす」の中に露伴の母のことが出て来るが、この女性は人間の器量の大きさを凌ぐものを持っておられたようである。この女性がどの程度まで学問に通じさまざまな教養を積んでおられたかは明らかにされていない。しかしその大器量は学問や教養の程度を尋ね返す隙を微塵も窺せていない。吾々は恐らく遙かに多くの書を読み、高尚な芸術に触れ、立派な思想を弁へている筈である。だが、果して吾々がこの母に対し、吾々の知識や思想を以って対等に太刀討できるであろうか。吾々の読んだ書物、鑑賞した高尚な芸術、学んだ立派な思想は、果して吾々にこの女性に匹敵できる人間の器量を与えたであろうか。この様な比較は唐突かも知れない。然し、吾々はこの比較を真剣に考え、謂はゞ露伴の母を鏡として吾々の人間の価値を反省して見なければならぬと思う。万一吾々にこの女性と対等に太刀討できる器量がないことに気付くならば、吾々の教養が果して吾々に何を与えて来たかに想到し、教養を積むことと、人間の器量との繋りがどの様であるべきかを見なければならぬ。

実篤の「五祖と六祖」という戯曲を読むと慧能大師は無学文盲、一介の米搗き男に過ぎなかった。彼は毎日ただひたすら米を搗くことに余念がなかったが、或る日、五祖の一番弟子神秀の作った「偈」を聞き、忽ち一篇の偈を読んだ。字が書けないから納所坊主に書いてもらったのである。この有名な「菩提はこれ樹にあらず、明鏡はこれ台にあらず」という偈が五祖の眼に留り、禅宗六祖の衣鉢を伝えられた。広く典籍に眼を曝し、修業の極致に達したかに思われた神秀が何故六祖の衣鉢を受ける資格がなく、無学文盲の米搗き男に破れ去ったか。ここにも、露伴の母に就いてと同様、吾々の深く考えるべき問題がある。

かって新聞に関根秀雄さんが書かれた短い文章の中に、モンテエヌガリオンの市長に任命されたとき、「市長になったからといって人間であることを止める必要はあるまい」と言ったということが記されていた。学識豊かな大学者が教壇や学界では尊敬され、自他共にその偉さを疑はないにも拘らず、自分の家庭に例へばお嬢さんが恋愛問題を起したような場合、どうしても手の施しようがなく、反って夫人の方が立派に問題を解決するようなことが、しばしばあるものであるが、これは学者が先づ人間であることを忘れた為であると関根さんはモンテエヌの言葉を敷衍しておられる。ここには、露伴の母や慧能大師について考えられる問題が更に身近かな形で提起されている。

「ファウスト」は一人の人間が疑い絶望し自殺さえ決意しながら世界をさまよひ、幾多の迂路を経て遂に救われる物語りである。処が天上の序言中では、ファウストの救済が最初から約束されている。ヘゲルの哲学は、神が自己を他在化し、客観の裡に自己を認識する過程であると喩へられる。とこ

ろが、神は自己を認識するまでもなく最初から神である筈である。何故、救済が約束されているにも拘らずファウストは悲劇と呼ばれているか。何故、神はわざわざ自己を認識しなければならないのか、ここにも吾々の考えるべき問題がある。

教養とは決して該博な知識でも、高尚な趣味でも、立派な思想でもない。まして、自由に着たり脱いだりできる着物でもない。人間の裡に可能性として孕まれている固有の、美しい、貴重な本質の形成が教養である。その限り、教養は思索や鑑賞でなく、行為、活動、努力、闘いでなければならない。温室の中に咲く美しくはあるが、ひよわな花であってはならない。広い世間の舞台に立って、あらゆる困難と卑俗さと醜さに揉まれながら獲得される涙と汗とにまみれた筋金の通った金剛不壊の結晶でなければならない。「人間よ、人間らしくあれ」とルソオが呼び、「自分自身を見失はなければどんな生活を送ってもよい。本来あるところのもので常にあればすべてを失っても良い」とゲーテが言ったのは、この意味であろう。

爾来、教養の必要性を説く声は喧しく、教養を求める意欲はいよいよ広く芽生え来ているが、思想の混乱と不安定な世界情勢の中にあって、学問・教育に携わり、教養を積もうと志すことにどの様な意義と目的とがあらねばならないか、それを吾々は今こそ真剣に考えて見なければならぬと思う。

## 近 況 報 告

渡 辺 光

お茶の水地理の編集委員から近況を随筆風に書けという御依頼を受けました。昭和45年の退職以来も、私の主観としては、特に改まって御報告申し上げることもない程の凡凡たる月日を送っておりましたが、6年に垂んとする歳月を経て顧みてみますと、当時と今とでは、かなり身辺の様子も違っておるのに気がつきました。しかし、この全期間の変化の過程を御報告申し上げますと長くなりますので、昭和50年に限り、それも学界に關係のある生活の律動及び関連した感想を書き綴ってみます。

色々細かいことはありましたが、私にとっては次の3つを挙げたいと思います。まず2月には、それまで務めさせて載いた日本国際地図学会の会長を、もう一期続けるように御推戴をうけたことあります。又4月29日の天長の佳節には、学界人として大変名誉なことではありますが、日本地理学会創立50年を期し、学会から名誉会員に選んで載いたことあります。顧みてみますと、実際はさして功績があったわけでもなく、むしろ会から御世話になりっぱなしであります。恐らくは、昭和48年9月2日に満70才に達したことと、会員歴46年余りという、物理的理由が会員の御目にとまった為と思います。いづれに致しましても大変有難い次第であります。

最後の1つは、8月18日から30日まで、カナダのバンクーバー市ブリティッシュコロンビア大学で開かれた太平洋学術会議に出席し、そこで昭和46年以来、9年間に亘って務めさせて載いた太平洋学術協会地理学委員会委員長の任から解放されたことあります。私に代ってこれから委員長をやって下さる方は、オーストラリアの国立大学(カンベラ)のワード(Ward, A. D.)教授であります。